

# 平易な言葉で深遠な世界

## 谷川俊太郎さん死去 「俗は大事」貫く

【評伝】

「或(あるい)はネリリシキルルシ ハララしているか」という一節が印象的なデビュー詩集の表題作「二十億光年の孤独」、

「生きていくということ」主題歌。

13日に92歳で亡くなった谷川俊太郎さんは多くの人に親しまれる作品を残した。「国民詩人」と呼ぶのにふさわしい存在だった。

父は哲学者で文学、美術、音楽などの評論でも知られた谷川徹三。2006年に俊太郎さんにインタビューした際には、「都会のインテリ家庭に生まれ、一人っ子で近くに親類縁者もない。宇宙に思いをはせる時間はたくさんあった」と少年時代を振り返った。

18歳のころに詩作を始め、詩人の三好達治の推薦によって、文芸誌「文学界」に作品が掲載された。それが20歳での「二十億光年の孤独」刊行につながった。

以来70年以上にわたる詩作において、哲学的な散文詩を集めた「定義」(1975年)など現代

詩の先端を行く前衛的な作品の一方、親しみやすい作品、子ども向けの作品を多数発表してきた。いずれも平易な言葉を用いて、深遠な世界を生み出す点は一貫していた。詩作以外に、作詞、翻訳、脚本・絵本執筆など活動の範囲は広がった。フットワークは軽く、長男で音楽家の賢作さんらと組み、自作の朗読会を各地で開いた。来場者との軽妙なやりとりからは気さくな人柄が伝わってきた。

貫いたのは「俗は大事」という姿勢であり、様々な注文に応じて多くの人に伝わる詩を書いた。「自由に書いてくださいと頼まれるより、器が決まっていた方がやりやすい」と話していた。それはどんな媒体でも自分は変わらないという自信の表れでもあったのだろう。

「俗は大事」と言われる物語「詩人の墓」に見られるように、自分をさらすことを恐れない強さを持つていた。

1996年の3度目の離婚後は詩作をやめることを考えたというが、「自分には詩を書くことしかできない」と思い直した。80歳を過ぎてからもSNSで情報を発信するなど、詩作の原動力である旺盛な好奇心は最期まで健在だった。(中野稔)

|| 1面参照

父・徹三の死の場面から始まる詩集「世間知らズ」や、詩人の男が好きになった娘から「何か言っただけじゃないことを」なんでもいいから私に言

「生きていくということ」主題歌。

|| 1面参照



詩人の谷川俊太郎さん(2019年)